

令和4年度 第2回白根巨摩中学校自己評価書（後期）

令和5年1月10日作成

校長 浅利 司

記述者 教頭 内藤大輔

学校教育目標

「思いやりの心と主体性・創造性を備えた白根巨摩中生の育成」

- ・学ぶ喜び・創り出す喜びを知り、主体的に学習する生徒
- ・正義を尊び、思いやりをもつ心豊かな生徒
- ・素直に見聞きし、考え、お互いを高め合う生徒
- ・心身ともに健康で、たくましく生きる生徒

取組重点

- 学習意欲と確かな学力の向上
 - ①教材研究の充実、効果的な授業の組み立て、学び合いを通しての深い学びの実現
 - ②信頼関係が保障される学級集団づくり
 - ③ICTの積極的な活用
 - ④家庭学習のさらなる改善
- 新学習指導要領の確実な実施と小中一貫教育に向けた取組の推進
 - ①新学習指導要領に基づく教育活動の改善
 - ②9年間を見通した教育課程の編成と改善
 - ③小中間での交流の推進（職員、児童生徒）
 - ④小中一貫教育に関する保護者・地域の理解の促進
- 生徒会活動における「4つのこだわり」と創造的な特別活動の推進
 - ①生徒会が掲げる「4つのこだわり」（挨拶・清掃・時間・服装）の、生徒主体での推進・充実
 - ②これまでの成果をもとにした創造的な特別活動の推進

I 全体評価

※A：5点、B：4点、C：2点、D：1点と換算し平均4.5を目標と考えた。1回目に引き続きこの指標を使い学校評価について考えていく。また、生徒及び保護者は平均4.0を目標とした。

全21項目中15項目が目標を上回る結果となった。得点分布に関しては以下のとおりである。

（後期）4.5以上：15項目、4.4以上4.5未満：3項目、4.3以上4.4未満：1項目、4.0以下：2項目

（前期）4.5以上：16項目、4.4以上4.5未満：1項目、4.3以上4.4未満：1項目、4.2以上4.3未満：1項目

4.0以下：2項目

後期の総合平均は4.5となり、前期自己評価の平均4.5とほぼ同様の結果となった。前期よりも向上した項目もあり、新型感染症が収束していないとはいえ、後期には多くの行事や取組があり、教師・生徒が目標達成のために努力した成果が出ていると考えられる。

特に「より良い学校にするために他の教職員と協力し取り組んでいる」の項目は4.9を上回った。白根巨摩中学校の教職員がチームとして一体となって取り組んだ成果であろう。前期より向上した項目として「校内研究のテーマのもと、深い学びの実現を目指した授業づくり」（4.5→4.7）と「合唱への取組」（4.4→4.6）、「小中一貫校への取組」（4.2→4.4）があげられる。11月に行った南アルプス市指定の公開研究会や桃源文化ホールで行った合唱発表会は、取組に時間や労力がかかるイベントであったが、教職員が生徒とともに力を結集した成果が実を結んだ。また「合唱交流会」や「あいさつ運動」等、小中一貫教育にも年間を通して取り組んできた。少しずつ成果が見え始めている。

課題点として「ICTの有効的な活用」と「部活動の指導」があげられ、4.0を下回った。特に「ICTの有効的な活用」については、「生徒」（4.2）「教職員」（3.8）「保護者」（3.3）と3者とも評価得点が低い。GIGAスクール構想で1人1台パソコンと校内無線LANの環境が整ったとはいえ、まだまだ活用しきれていない面があり、今後の活用法の研修やさらなる環境整備が求められる。また「部活の指導」については土日地域移行制度が進められており、今後の進捗を見守りながら工夫した運用を考えたい。

来年度以降も感染症対策を行いながらの教育活動の実施が予想される。市の指定の研究は終わるが、ICTの活用を含め、学力向上めざした授業改善をさらに研究していく必要がある。また小中一貫教育についても小学校と連携を深めながら、計画的に適切な教育活動が行えるよう目指していきたい。

Ⅱ 各領域の評価	
1 学校運営	
達成状況	◇領域平均は4.7であり、前期と同じである。「学校教育目標の具現化」と「校務分掌を通じての学校運営に参画」は0.1ポイント下がったが、全ての項目で目標値である4.5を超えた。特に「他の教職員との協力」の項目は4.9である。職員室での様子や教職員一人一人の姿勢からも、本校の職員は前向きに学校教育目標の具現化に向け誠実に努力しているといえる。 ◇報告、連絡、相談、確認を適切に行っていて、職場相互の信頼関係も良好である。 ◇感染症対策で多くの活動が制限されたが、その状況の中、工夫しながら公開研究会や学園祭、強歩大会、合唱発表会等多くの行事を成功させたことへの成果が数値に表れている。
対応	・次年度以降も感染症対策を行う中で各種行事・活動を進めることになる。行事・活動を生徒とつくりあげる過程を大切にし、充実感ある取組を教職員の協力のもとに行う必要がある。 ・学校全体の教育活動に対して、相互理解のもと組織的に取り組み、課題を改善しながらPDCAサイクルに乗せ、工夫と向上を目指す。 ・各自が勤務効率を考えた働き方についてセルフチェックを行い、ライフワークバランスを意識した勤務の在り方を検討する。一人で悩むことの無い開かれた職場環境を作る。同時に、管理職は教職員のメンタルヘルスについて細心の注意を払うよう心がける。
2 教科指導	
達成状況	◇領域平均は4.4であり、前期より0.1ポイント向上した。 ◇「学習指導要領の改訂を踏まえた学習評価」への取組は前期よりも向上し、生徒の様子を多面的に捉えながら授業に取り組んでいることがわかる。 ◇教師アンケート「校内研究のもと、深い学びの実現を目指した授業づくりに努めている」は前期より0.2ポイント高くなった。公開研究会等を通して各々が授業づくりに向き合い、授業改善に取り組んだ結果である。来年度は、市の指定は外れるが、今後も成果を踏まえ研究を推進していく必要がある。 ◇校内研究のテーマである授業での「聴き合う」指導について、生徒アンケートでは「先生や友達の話をしっかり聴くことができたか」の項目の肯定的回答が97%を超えた。授業での取組の成果が表れてきた。 ◇生徒アンケートの肯定的回答が「学校の授業は楽しい」が89.9%、「学校の授業がわかる」が87.7%となり、他の設問より数値はやや低いものの、多くの生徒が授業に積極的に取り組んでいることがわかる。ただ基礎学力に不安のある生徒への対応は今後も検討していく必要がある。 ◇保護者アンケートの肯定的回答が「お子さんは、授業の内容がわかっていると思うか」は75.6%と「ICT活用」に次いで低い。「学校は基礎学力定着のための指導をしていると思うか」が90.3%となっており、学校の指導方法については理解しているものの、成果については課題があることがうかがえる。 ◇家庭学習においては長年課題であったが、本校独自の取組としてのタイアップチャレンジ（週末課題）が定着してきていて成果が表れてきている。生徒の肯定的回答は92.9%、保護者の肯定的回答も87.8%と高く、タイアップチャレンジ通じて家庭学習に向かう姿勢に積極性が見られようになった。生徒の取組について、今後も家庭の協力を得る中で検討・改善を行っていく。 ◇「ICTの有効的な活用」については、「生徒」(4.2)「教職員」(3.8)「保護者」(3.3)の3者ともに評価得点が低くなった。基本的な使い方について、生徒とともに活用方法を学んでき

	たが、今のある環境の中での活用方法・指導方法に課題がある。 ◇全国学力・学習状況調査や学力把握調査の結果分析を行い、今後も継続的に授業改善への課題を研究していく。
対応	・やまなしスタンダードをもとに、校内研究で取り組んだ「課題づくり」等、研究の成果を取り入れて、「分かりやすい授業づくり」「深く考える授業づくり」を推進する。また学習指導要領に対応した学習指導・学習評価についても研究を推進していく。 ・来年度は市の指定ではなくなるが、今年度の校内研究をさらに推進し、「生徒の聴き合う、学び合う活動を大切にした授業」を工夫・改善していく。また今後も続くであろう感染症対策を意識しながらも、話し合い活動等が主体的に行えるよう、ICTの活用も踏まえ研究していく。 ・教師個人の力量を高めるために、互いの授業を参観する機会を確保する。互いの工夫や改善について話し合い、具体的な改善ポイントについて共通認識をもつ研究を行う。 ・タイアップチャレンジを継続すると同時に、「学びの甲斐善八か条」の活用や、家庭との連携、家庭学習の時間の習慣化、取組時間・内容の改善についての研究を進める。合わせて生徒の連絡帳（やりとり帳等）や定期試験の学習計画表の取り組み表を活用して、生徒が計画的に家庭学習を進めるように指導する。 ・生徒の1人1台パソコンを授業でさらに活用するために、ICT活用頻度を高めるための研修や取組を積極的に行う。 ・小中一貫教育の取組において、さらに小学校の教職員との相互理解を深め、9年間を見通したきめ細かい児童生徒の育成を研究する。 ・保護者アンケートの数値の結果や記述内容から、基礎学力の定着や家庭学習の定着についての学校への期待は大きい。「補充・発展の時間」の効果的な活用、基礎学力の定着、不断の授業改善等、今後も努力していく。
3 生徒指導について	
達成状況	◇平均得点は4.7で前期と同様である。本校の教職員が継続して生徒に寄り添い、きめ細かく生徒指導を行っていることがわかる。 ◇生徒アンケート「学校生活は楽しいか」の項目において、前期と同様肯定的回答は約90%、「困ったときに相談できる先生がいるか」については、前期と同じ4.3であるが、昨年度から比べると向上傾向がみられる。学年によって若干差はあるものの、生徒との関係の構築ができており、教師が生徒に寄り添い、素早く適切な対応がなされている。また、保護者アンケート「お子さんにとって、学校は楽しい所だと思うか」も肯定的回答は94%を超えており、多くの保護者から理解を得て教育活動に取り組んでいると考えられる。 ◇不登校等のケース会議を関係機関と連携して行っている。また学区内の小学校にも勤務するSC、近隣の未成年の事件等に係るSSを交えた生徒指導支援委員会を定期的に開催し、生徒の生活環境も含めた生徒指導に心がけている。また、生徒とのやり取り帳（連絡帳）や、年5回の心配事アンケート調査と個人面談等により、生徒の様子を見取り、適切に指導している。 ◇保護者アンケート「学校は、子どもの困ったことや悩み事等に、対応していると思うか」の肯定的回答は93%を超えている。ただ、学校での生徒の様子を保護者と共有できているかについては、「できている」と感じている割合が、保護者が約87%、生徒は約86%とやや低い。学校で生徒一人ひとりの様子を注意深く見守り、学校が保護者とのより一層の連携を取る必要がある。

対応	・問題行動の未然防止策として、生徒への声かけを積極的に行い、道徳や総合、特別活動などの授業を通し、心の教育をさらに充実させる必要がある。さらに、問題を抱える生徒や人間関係について、その情報共有を素早く確実に担任や学年に行い、家庭にも伝えることで、早期に解決していく。 ・今後も全教職員が相互に連携し、学校のきまりや指導重点について共通理解し、組織的な生徒指導を行う。また、学年を問わず報告・相談・記録などを丁寧に行い、必要に応じて関係機関とも連携していく。 ・感染症対策を行う中で、生徒の自律的活動を促し、仲間外れやいじめの起こらない環境づくりに努める。 ・小学校との連携を密にし、小学校での様子や人間関係を共有し、相談できる体制を構築する。「やりとり帳」や「悩み事アンケート」、担任との二者懇談等、日常的な生徒とのコミュニケーションの中から、トラブルを未然に防ぐように対応する。
4 特別活動	
達成状況	◇この項目の平均は4.3で、前期4.4より0.1ポイント下がった。2学期は活動の制限があったものの、ほとんど全ての行事に取り組むことができた。教職員も生徒たちと苦労をともにし、生徒との一体感をより多く感じたと考えられる。生徒アンケートの「行事への満足度」の肯定意見は97%を超えた。学園祭や合唱活動は長期間取り組み、対策しながらも実施したことで充実感が得られたと考えられる。 ◇生徒アンケートでは「生徒会活動」「行事への協力」「合唱活動」のいずれにも94%以上が肯定的評価であった。なかでも「行事はみんなで協力して楽しくできているか」については、約97%以上が肯定意見であった。感染症拡大防止対策の中で苦労しながらも、生徒たちが行事を通して、協力しながら目標を達成しようとする様子がわかる。 ◇「部活動の指導」の評価が3.9と低い。生徒の技能を高めるため、専門的知識も必要であり、土日（どちらか一方）の指導もある。働き方改革も踏まえ、今後制度の改革等にも目を向けていきたい。
対応	・今年度は行事の取組や技能教科において感染症対策の制限があり、教職員、生徒の取組に苦労したが、それを乗り越えようとする意欲が高まり、活動に対してはどれも積極的だった。来年度以降も、難しい状況を変更・工夫しながら生徒の心身の成長に寄り添い実施する努力を続けていく。特別活動を積極的に行っていくことは、より良い人間関係の構築や日常生活のルールを守ること、社会貢献の教育的意義等を学ぶことにつながる。 ・各行事の反省を分析し、行事および生徒会活動全般を見通しながら、来年度の年間計画に位置付けていく。生徒が意欲的・主体的に取り組むことができるよう仕組んでいく。 ・この教育環境を維持するためにも、部活動への関り（土日休日移行制の進捗）も含め、教職員のライフワークバランスへの意識を高め、教職員が疲弊しない取組も視野に入れ、検証・改善していく。

5 健康安全 信頼される学校 他	
達成状況	◇今年度「教職員としての自覚を持って、職務に従事している」は4.8となり、本校の教職員が教員としての責任と自覚をもって、生徒を育成に携わっていると考えられる。 ◇教員アンケートの領域平均は「健康安全」が4.6、「信頼される学校」が4.7で、感染症防止対策における日常の生徒への健康安全の配慮、過ごしやすい学校生活に対する生徒への細やかな対応、施設の整備についての意識は高い。 ◇保護者アンケート「保護者の相談等に丁寧に対応しているか」の設問に99.3%、「通信・メール等で学校の様子を伝えていると思うか」の設問に94.5%が肯定的回答をしていることから、学校は、保護者にとって相談しやすく、お互い様子が伝わりやすい環境だと考えていることがわかる。 ◇保護者アンケート「学校は子どもの安全に配慮し、安全管理及び安全指導に努めていると思うか」の項目について、肯定的回答は約98%であることから、本校教職員が子どもの心身の安全に配慮しながら教育活動に取り組んでいると保護者が考えていることがわかる。 ◇生徒アンケート「家の人と学校生活の様子などについて話をするか」は4.3で低い評価になっているが、令和2年度から向上傾向がみられる。否定的回答は14.6%で7人に1人は家庭での保護者とのコミュニケーション不足である。それぞれの家庭の事情もあると思うが、学校での様子について各家庭との連携を深める取組を行っていく必要がある。
対応	・学校生活において心配な状況のある生徒については、家庭環境も把握し、状況に応じて全職員に情報共有しながら、組織的な生徒指導を行っていく。また、生徒と保護者のコミュニケーションを図る方策として、連絡帳や通信等を活用する。 ・「学年だより」「給食・保健・図書・進路だより」「学校メール」等学校からの情報発信を積極的に行うとともに、それらを通して家庭との連携を密にし、生徒の健全育成に向けて一層努力する。 ・教職員の学校設備や状況把握、様々な危機的な状況を想定する意識を高める必要がある。日々の教育環境の点検、生徒のきめ細かい見取りなど、全教職員が情報共有を行いながら教育活動に取り組む。 ・部活動や特別活動の指導において、安全対策や指導方法について、事後に反省・検討・改善を行い、常に改善すべき点や努力すべき点を検討していく。 ・今後も地域からの連絡や支援を大切にし、本校の「PTA」「体育・教育後援会」等の組織を積極的に活用したり、市の青少年育成団体等と協力したりしながら地域全体で子どもを育てる意識を醸成する。